

氏名	三和 秀平		
学位の種類	博士（心理学）		
学位記番号	博甲第 8638 号		
学位授与年月	平成 30年 3月 23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	教師の学習動機づけが授業力および子どもの自律的な学習に与える影響——教科指導に着目して——		
主査	筑波大学准教授	博士（心理学）	外山 美樹
副査	筑波大学教授	教育学博士	櫻井 茂男
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	茂呂 雄二
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	濱口 佳和

論文の内容の要旨

三和秀平氏の博士学位論文は、教師の教科指導学習動機と授業力および子どもの自律的な学習との関連について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的） 著者はまず、学習動機づけに関する先行研究を概観し、近年の主要な動機づけ理論についてまとめている。そして、教師を対象とした動機づけ研究についてもレビューを行い、教師にとっても自律的な動機づけが重要であること、また教師の動機づけは教師本人だけでなく、子どもの動機づけにも関連することを明らかにしている。そのうえで、従来の研究は教師特有の動機づけである“子どものため”といった側面が反映できていない、想定している職務の幅が広すぎる（Fernet et al., 2008）といった問題を挙げている。そこで著者は、“子どものため”といった側面も考慮し、職務を限定した尺度を作成し、その信頼性および妥当性を確認すること、教師の教科指導に関する動機づけと授業力の自己認知および子どもの自律的な学習動機との関連について明らかにすること、得られた結果をもとに教師の動機づけについて整理することを目的として7つの研究を行っている。

（対象と方法） 研究1、2、4、5、6では小学校・中学校・高等学校の教師を対象に質問紙調査を実施している。また、研究7では小学校教師およびそのクラスに在籍する子どもを対象に質問紙調査を実施している。さらに研究3では高等学校教師を対象に半構造化面接を実施している。

（結果） 本論文は、全7章から構成されている。第1章から第3章では先行研究の知見を概観し、目的が示されている。第4章から第6章では実証的な検討が行われている。第7章ではこれらをもとに総括が行われている。

第4章では教師の教科指導学習動機尺度を作成し、所属や経験年数による教科指導学習動機の差を検討している。【研究1】では、教師の教科指導学習動機尺度の作成および信頼性と妥当性の検討を行っている。その結果、教科指導学習動機として、“内発的動機づけ”、“子ども志向”、“熟達志向”、“承認・比較志向”、“義務感”、“無関心”の下位尺度が得られ、作成された尺度の信頼性および妥当性が確認さ

れている。【研究2】では、教師の学校種および経験年数による教科指導学習動機の違いについて検討されている。その結果より、学校種による十分な差はみられないが、経験年数については、熟達志向および承認・比較志向においてともに新任が若手、中堅、ベテランよりも高いことを明らかにしている。さらに、若手に着目した分析では、熟達志向は新任が4年目以降の教師よりも高いこと、承認・比較志向は新任が6年目以降の教師よりも高いことを明らかにしている。【研究3】では、半構造化面接により、新任教師の熟達志向および承認・比較志向の高さに関連する要因について検討している。その結果より、“理想と現実のギャップ”、“勉強不足の実感”、“現状の受け入れ”、“こうあるべきだという教師像”などが関連していることを明らかにしている。

第5章では、教師の教科指導学習動機と授業力の自己認知の関連について検討されている。【研究4】では、縦断調査を実施し、教科指導学習動機と授業力の自己認知の相互因果関係について検討している。その結果より、6月の子ども志向および熟達志向が12月の授業力の自己認知と正の関連を示していること、従来の研究で適応的であると考えられてきた内発的動機づけは、授業力の自己認知と関連を示さないことを明らかにしている。【研究5】では、教科指導学習動機と授業力の自己認知の関連を媒介する要因として学習方略の役割について検討している。その結果より、内発的動機づけ、子ども志向、熟達志向はいずれも計画・振り返りの方略を介して授業力の自己認知と正の関連を示すこと、子ども志向は同僚の活用の方略を介しても授業力の自己認知と関連することを明らかにしている。

第6章では、教師の教科指導学習動機と子どもの自律的な学習との関連について検討されている。【研究6】では、教師の教科指導学習動機と注視・傾聴との関連および授業力の自己認知の媒介効果について検討している。その結果より、内発的動機づけおよび子ども志向が授業力の自己認知を介して注視・傾聴に正の関連を示すこと、無関心は注視・傾聴に負の関連を示すことを明らかにしている。【研究7】では、小学校教師とそのクラスの子どもの対象に、教科指導学習動機と子どもの自律的学習動機づけとの関連および子どもが認知する自律性支援の媒介効果について検討している。その結果より、子ども志向が子どもの認知する自律性支援を介して、子どもの内発的調整と正の関連を示すことを明らかにしている。

(考察) 以上の知見を踏まえ、第7章にて、著者は各教科指導学習動機の役割について整理をし、教師の認知する授業力の向上や子どもの自律的な学習においても、“内発的動機づけ”、“子ども志向”、“熟達志向”のような教師の自律的な動機づけが重要であるとまとめている。中でも、従来検討されてこなかった子ども志向は、他者志向的動機（伊藤，2008）の“他者のため”といった動機と“自分のため”といった動機が統合した状態に近いものであり、教師にとって望ましい動機づけであると述べている。そして、教師の動機づけについて、自律性の程度のみではなく他者志向性の程度の観点も考慮してとらえることを提案している。

審査の結果の要旨

(批評) 教師を対象にして、教科指導学習に関する動機（教科指導学習動機）と授業力および子どもの自律的な学習との関連について検討した研究である。さまざまな観点から教師の教科指導学習動機の役割について詳細に検討、整理し、教師の動機づけについて、新たな理論的な枠組みを提供しており、学術的意義だけでなく教育的意義のある論文と評価された。

平成30年1月25日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。